

わたしの 効果倍増! 教材活用術

『まんてんスキル計算』を利用

香川県高松市立鬼無小学校教諭

戸高 誠子

1. はじめに

くり返しドリル学習は、学んだことを定着させるために欠かせないものです。しかし、子どもたちは単調なくり返し学習をあまり好みません。「面倒くさい」というのが大きな理由です。子どもたちは、家庭では学習塾や習い事で時間が詰まっただけで、「することがいっぱいある」という状況なのでしょう。

このような中で、何とかくり返しドリル学習を習慣化し、子どもたちが「できた」と満足感を味わえるような方法はないものかと試行錯誤を続けていました。

その課題を解決するために、私は新学社の『まんてんスキル計算』を利用しています。



▲『まんてんスキル計算』（新学社）

日々の教育活動の中で、教師も子どもたちも無理なく活用できて、「仕上げた」という満足感をもてるような活用方法を探りながら取り組んできました。

2. 4年生の姿

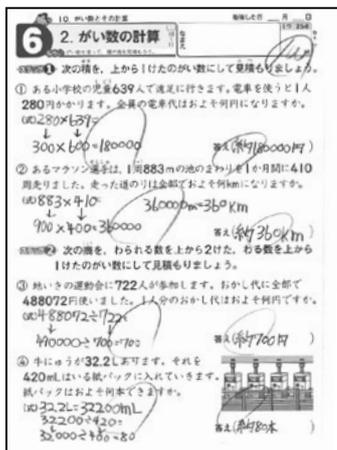
算数では、4年生になると二段階思考・三段階思考で、見通しをもって問題解決をすることが必要になります。計算問題でも文章題でも、「たし算だけ・かけ算だけ」という思考から、「たし算をしてからかけ算」「ひき算をしてわり算、更にたし算」というように問題解決を進める力が必要になってきます。

このような力をつけるためには、問題の全体を把握し、解決のための見通しをもつ力が必要になります。そこで、『まんてんスキル計算』を使って、子どもたちがしてきたことを、1回目とは違う方法でさせれば、「自分の力でできた」という満足感を味わえるのではないかと考えて実践してきました。

3. 活用例

(1) 『まんてんスキル計算』に書き込む

このドリルは、書き込みスペースが多く確保されているので、大きな文字を書く子どもたちにとっても使いやすく、楽しみながら学習を進めることができます。



▲『まんてんスキル計算』の使用例。
式や答えも書きやすい。

(2) 採点と直しの活動

余白のスペースに間違えた箇所を直します。しかし、どうしても直すスペースが不足する子どもたちも出てきます。そのような時は、メモ用紙を配布します。1枚でだめなら、2枚、3枚とできるまでやり直しをします。

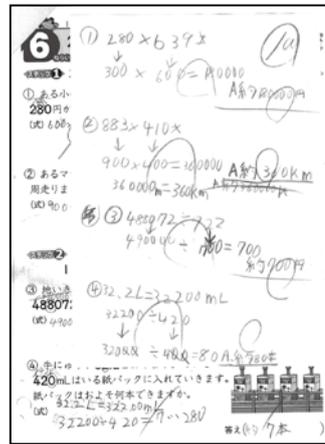
いつの間にか、ドリル全体が厚くなります。それは子どもたちの頑張りの足跡なのです。子どもたちに「こんなに頑張ったんだよ」と声をかけると、「ここがわからなくて困った

日々の授業で使う教材や教具。

隣のクラスや隣の学校のあの先生は、一体どんな使い方をしているのでしょうか？

このコーナーでは、気になる教材活用術を紹介します。

けれど、わかるようになってきたよ」とか、「問題の解き方がわかってきたよ」などと、自分が乗り越えた「壁」を自分の言葉で語り、満足そうにする様子がたびたび見られるようになりました。



▲間違い直しをメモ用紙に書いてドリルに貼り付ける。

(3) ノートにくり返しドリル練習

自分で書き込んだドリルを再活用します。連休や夏休み・冬休みなどの長期休暇の宿題にします。自分で完成させたドリルをもう一度自分のノートに作り上げるのです。しかし、「やるよ」と言ってもすぐにできるものではありません。

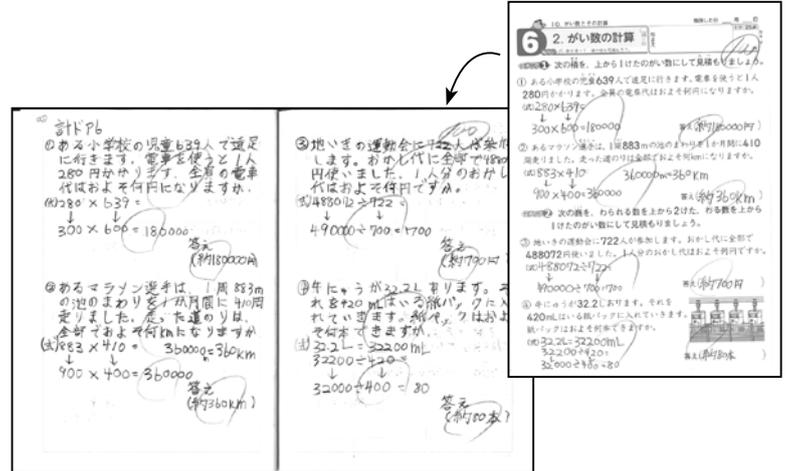
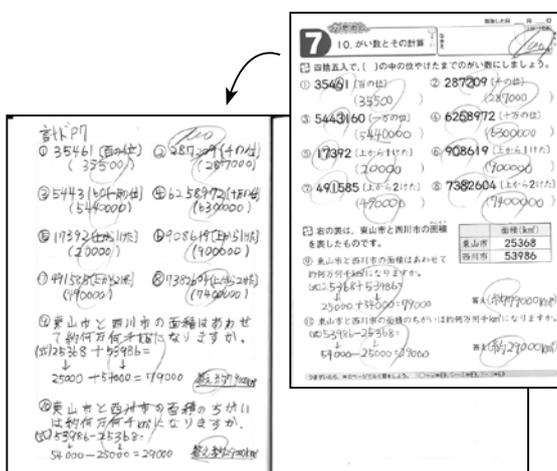
① まず、授業の中でノート指導を兼ねてやり方の説明をしました。子どもたちは日々の学習で、ノートは詰めてぎっしり書くのではなく、余白を大切にしておわりやすくと整頓して書く習慣を身につけていきました。初め子どもたちは、ノートに余白をとって書くこ

とを「もったいない」と言っていたのですが、学習の足跡が残ることでもわかりやすくなり、納得できる復習ができたり、テストの点数が上がったりすると、気に入ったようで、教師の指示がなくても余白をとってノートを作る習慣が身につけていきました。

② 次に、この習慣がついた頃から、ドリルをノートにわかりやすく視写させました。もちろん全てのページの視写をするわけではありません。ポイントとなるページを抜粋して与えました。問題文・計算式・答えなど、全てを視写します。自分で完成させたものを視写しても効果がないようにも思いましたが、結果は逆でした。子どもたちは見直しをもつようになりました。同じことを2回するのだから、見なくてもできるところは、自分の力でどんどん進めます。行き詰まると答えを見て確認するようになりました。

③ 最後に採点です。自分が作った1回目のドリルの答えを見ながら、採点をします。すると、「できたー」という歓声が上がりました。1回目は難問でも2回目は苦なくできるので、これは意欲の向上につながりました。

このような流れを、毎日の宿題の中に入れて、少しずつ練習を重ねました。この一連の流れは、初めからうまくいくわけではありません。当初はわかりにくいノートもたくさん出てき



▲1回目はドリルに書き込み、2回目はノートにドリルの問題文・計算式・答えなど、全てを視写する。

